

書評

さまざまな軸からがん患者の心のケアをとらえた実践書

〔評者〕 鈴木 伸一

早稲田大学人間科学学術院 教授

内富 庸介, 大西 秀樹, 藤澤 大介(監訳)

『がん患者心理療法ハンドブック』

2012年にがん対策推進基本計画が刷新され、がん患者の精神的苦痛に対する心のケアを含めた全人的な緩和ケアのさらなる充実に向けた取り組みが始まっている。がん対策基本法の制定以降、がん診療を行う各地域の主要な医療機関に緩和ケアチームなどが置かれ、がん患者の疼痛管理やせん妄およびうつ症状などへの対応が積極的に行われるようになり、がん患者の心のケアの基盤は整いつつある。しかし、がん患者が医療者に望んでいる心のケアの範囲と内容は、もっと多岐にわたっていると思われる。がん診療を行う医療者も、患者が「がん」という病を抱えながら生きていくがゆえに抱えるさまざまな生活上の不安や葛藤をいかに理解し、ケアしていくかが今後のがん診療の中核的な課題であることは理解しつつも、「誰が」「どこで」「どのように」ケアしていくかという点においては、スタッフの専門性や方法論、さらには状況的な制約などから、具体的な取り組みを実行できないジレンマを感じているのではないだろうか。

このたび刊行された『がん患者心理療法ハンドブック』は、がん患者の心のケアの充実に向けた新たな取り組みへの「道しるべ」になるような、大変優れた解説書である。国際サイコオンコロジー学会(IPOS)公認テキストブックにも指定されており、その内容はがん患者への心理療法の全体像を理解しつつ、かつ各論の重要ポイントをしっかりと学ぶことができる構成となっている。

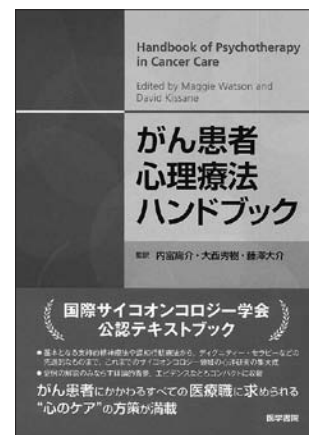
4部構成からなり、第1部では「治療の個人モデル」として、主要な心理療法(支持的療法、認知行動療法、認知分析療法、マインドフルネス心理療法、リラクゼーション療法、動機づけカウンセリング、ナラティブ・セラピー、ティグニティセラピー、筆記による感情開示)が章立てされており、各章では当該の心理療法の背景理論、適応となる患者像、治療の流れと技法、事例提示、エビデンスなどが網羅的に解説されている。特に、第1章は「すべてのセラピーに不可欠な要素」という副題が付けられ、がん患者が抱える心理社会的問題や苦悩と、それに向き合う医療者の基本的な心構えや資質などについて詳細に解説されている。

第2部は、「治療のグループモデル」として、感情表出、心理教育、意味の探求、配偶者との関係性などをテーマとして章立てされており、各グループ療法の展開が解説されている。いずれも、病棟や外来で導入可能な患者支援プログラムとしてのアイデアを提供してくれる。

第3部は、「カップルおよび家族療法」として、進行がん患者の夫婦、性機能障害、ターミナルおよび死別の家族ケアがテーマとして章立てされており、がん患者のみならず、配偶者や患者の子どもなど、患者と患者を取り巻く家族の苦悩をどのように支えていくかについて詳細に解説されている。

第4部は、「ライフサイクルに応じた治療」として、遺伝腫瘍、小児がん、がん患者とその子どもの支援、高齢がん患者、死別がテーマとして章立てされており、ライフサイクルのさまざまな局面で「がん」という病を抱えることの苦悩とそれによって生じる生活上の困難の緩和に、心理療法をどのように活用していけばよいかが具体的かつ詳細に解説されている。

以上のように、本書はがん患者への心理療法の展開を、心理療法の方法論にとどまらず、がん診療の現場でどのような対象や文脈(初発、再発、ターミナル、遺伝、小児、高齢者、死別、子育て)に、どのようなセッティングで展開するか(個人、グループ、本人、家族)といった複数の異なる軸からがん患者の心のケアをとらえ、その具体的な実践を紹介している点が、これまでの書籍にはなかった特に優れた点であることを強調しておきたい。本書が、がん診療に携わる多くの医療者に活用され、わが国のがん患者の心のケアがさらに充実していくことを期待したい。



A5 頁456 2013年

定価 4,200 円(本体 4,000 円+税 5%)

[ISBN978-4-260-01780-0] 医学書院刊